

〔第26回 学術集会シンポジウムI〕

## 家族ケア症例研究会での討議を経て論文化した事例研究

東京医科大学看護学科

鈴木 征吾

私は小児集中治療室の看護師として、心停止蘇生後の新生児に入院から死亡退院まで関わる経験をした。母親は産後の体調不良で、児の入院から10日間以上、父親のみの面会が続いた。父親は治療の差し控えを求める一方で、母親は可能な限りの治療を望んでいた。この事例は児が亡くなった後も、私にとって非常に印象深く記憶されていた。そのような折に、東大家族ケア症例研究会でこの事例を発表する機会を得た。この症例研究会は、東京大学家族看護学分野が定期開催しており、都内の看護系大学や医療機関からテーマに関心を持った医療関係者が集まって、看護職等が実践した家族症例の援助過程を丁寧に紐解き、家族への理解を深めることを目的としている。ここで討議を経て、私は経験した事例を

「両親で意見の相違はあったが、最終的に両親としての意思決定に至った事例」として捉えなおすことができた。その後さらに、家族看護研究者から支援を受けて分析を進め、論文として公表することができた。症例研究会で共有された他の看護師の経験や視点は、私が家族の見方や援助の仕方を振り返るための大きな学びとなった。また、論文を投稿して査読を受けたことにより、実践したケアの意図がより明確に読者に伝わるように記述することができた。私は事例研究として論文を執筆した経験がなかったが、このようなプロセスのおかげで、個人の経験を多くの看護職との共有財産にすることができたと考えている。

## 実践者と研究者が協働する事例研究の経験から —実践の妙を伝える科学論文のために—

東京大学大学院

吉田 滋子

座長の山本先生を筆頭とする研究班では、卓越した看護実践について、実践者自身には十分意識化されていない実践知まで「実践者と研究者との語り合い」を通して意識化し、「ポイントを概念化して示す」という形の事例研究に取り組んでいる。そのメンバーとして研究者の立場で取り組んできた経験について報告の機会をいただいた。

査読で「新規性」や「普遍性」が指摘されがちなことについては、掲載に至った論文の結果を例に引きながら次のように説明した。我々の事例研究では、実践の「細部のコツ」や「意図」まで見える化し、時期の流れと絡めて「全体の組み合わせの妙」についても示すよう試みている。実践をありありと伝え、読者がヒントを得やすいよう言語化している

ことが「新規性」に相当するのではと提案した。「普遍性」についても、そのように示されたコツ等が、似た要素を含む事例に広く使われ得る可能性をお話した。

また「メタファー」を使った表現が主観的であるとの指摘を受けて削除し、事実ベースの記述のみに修正した経験についても紹介した。その上で、メタファーには受け手のイメージを広げエッセンスを共有し易くする効果があるので、一概に論文から排除するのではなく、事実ベースの記述に併記する方法もあるのではと具体例を挙げて提案した。メタファーだけでは初見の読者に伝わり難いことがあるが、用い方によっては読者により理解されやすくなること等が話し合われた。